

久留米大・バイオ統計センターでの 2 年数か月

江村 剛志 (統計数理研究所)

久留米大学バイオ統計センターは今年で設立 20 周年を迎えます。設立当初から日本最大級の生物統計の研究・教育機関であり、日本全国に生物統計学者・統計家人材を供給してきました。バイオ統計センターとはどのような所なのか、計量生物の多くの方々にとって興味があると思いました。簡単にいうと大学院なのですが、それは久留米大の方にもあまり知られていません。私は先月より統計数理研究所へ異動となりましたが、これまで 2 年 4 か月の間、バイオ統計センターで統計学の研究・教育に貢献してきました。今も客員教授ですが、この期間を振り返りたいと思いました。

バイオ統計センターに配属となった経緯から説明します。2021 年まで 15 年ほど台湾で統計学の専任教員を勤めました。2020 年台湾の長庚大で教えていた時、台-日間の感染症防止対策で事実上の渡航不能が続いたことが原因で日本への帰国を模索してたさなか、JREC でバイオ統計センターの公募を見つけました。知っていた室谷先生に連絡を取り、瞬く間に Zoom 面接、その後採用が内定しました。4 月採用のところを、2 月からと便宜を図っていただきスムーズな異動となりました。

2 月 1 日の辞令交付式があるようでしたが、隔離期間のため一週間ほど遅れてのバイオ統計センター着任となりました (Delayed entry)。バイオ統計センターの新任教員には、半年の猶予期間が与えられ、教育の義務が大幅免除されます。これは台湾から帰国し、日本で教育・研究を始めた私にとってとても重要なサバティカルのような期間でした。

バイオ統計センターに来てすぐわかったことは、教員と学生の距離が近く、開放的なことです。1 つのフロアに全研究室・講義室が配置されているため、その日來ている教員・学生はお互い把握できるほどです。私は毎日論文を印刷しに PC 室へ入りますが、そこでどの学生が PC 室で勉強しているか把握できます。PC 室の前にあるセンター長室は解放されていて、いつでもだれでも声をかけられます。私は集中できないので扉を閉じていますが、それでも学生は私の部屋にもよく来てくれます。教員は夜遅くまで仕事する方が多いですが、気難しい教員はいません。

バイオ統計センターでは、教員と学生が一度に会する「発表会」が年 3・4 回あります。発表者はときに厳しいコメントに対応し、今後の研究に生かします。常勤の教員に加え、客員教授の柳川先生・廣瀬英雄先生が出席し、学生にアドバイスをします。発表後は教員が図書室のテーブルを囲む恒例の反省会が行われ、発表を評価し、指導教官の意見交換が行われます。その総まとめ的なものが、3 月に熊本・阿蘇の山中で行われる黒川温泉合宿という泊りがけの発表会です。

バイオ統計センターの授業は金・土のみ、社会人が受講するためにデザインされています。授業時間は極めて長く、特に金曜日は朝から夜遅くまで 8 時間以上の講義となります。なので、学生も教員も授業後はとても疲れます。個人的にこのような集中講義は、まとまった研究の時間を確保しやすいため、好きでした。土曜勤務は好みがわかるかもしれませんが、大体の方は慣れます。

授業が無い月曜～木曜は宿題をこなしたり、教員と個別ミーティングをこなしている学生が多いです。加えて、有志の勉強会もあります。これは久留米大の学生・教員内のクローズドなものですが、学生同士でアカデミックな議論が行われる有意義な時間です。このように、バイオ統計センターは、教員の指導だ

けでなく、学生同士でも勉強をしています。教員は久留米大の医学部の統計学の授業も担当しており、フルタイム学生はTAとして簡単な教育に関わる機会があります。

バイオ統計センターの研究活動は教員個人が各々異なるスタイルで行っています。私の独断ですが、方法論の研究に特化（私）、方法論とコンサル（古川先生・大山先生・松本先生）、コンサルに特化（室谷先生）の3つパターンが見られます。ただ、お互いがどの統計手法が得意かある程度把握できているため、良い協力関係になっていると言えます。医学部と近いことからコンサルティング案件は来ることがありましたが、受けるかどうかは自由で私は受けませんでした。

バイオ統計センターの年間行事は次のとおりです。4月初めには、教員・学生が一堂に会するオリエンテーションがあり、学生・教員は自己紹介します。新入生歓迎会ではバイオ統計センターのセミナー室でピザや寿司などを食べます。学期が始まると授業はもちろん、毎月バイオ統計公開セミナーがあり、外部から講師が招かれます。夏休みに入ると、台湾学生を一か月間教育する夏季インターンシップがあり、センターの学生は先輩として台湾学生を教育しつつも国際感覚を身につけます。秋には、統計連合大会やBiostat ネットワークに積極的に参加し、バイオ統計フォーラムを開催します。冬は修論の追い込み時期で学生も教員も遅くまで勉強しています。3月にはマラソン部（顧問：古川先生）が始動し、部員は福岡小郡ハーフマラソンに参加、その直後に年度の総括である黒川温泉合宿が行われます。

以降は個人的観測ですが、センターには今後の課題がいくつかあると思われれます。その1つは、方法論や理論の研究が手薄になっていることです。医療データを統計ソフトで解析した結果を報告する研究で学位論文を取得するケースが多く、統計学の学術誌に学位論文を発表するケースは少数派と思えます。バイオ統計センターが今後も計量生物学会の中で中心的役割を果たし続けるには、方法論と実データ解析の両面で実績が必要なのは言うまでもありません。

バイオ統計センターには数学が多少出来なくても、統計学の勉強をしたい学生を歓迎しています（必要な数学は難しくありません）。海外留学の機会もあります。バイオ統計センターの教員の裁量は大きく、やりたい事（企画など）が実行できます。これを読んでいる、やる気のある学生・研究者の方々は、是非バイオ統計センターで研究・教育活動に携わることを考えてみてください（学生・教員共に募集中です）。